



《宣教メッセージ》

共同体の成長を夢見て



主教 アンテレ 大畑 喜道

日本酒醸造をする家では決して食べないものをご存知でしょうか。朝定番の納豆は決して食べないのだそうです。もしも醸造所に納豆菌が持ち込まれると、大切な日本酒を醗酵させる酵母を食べつくしてしまうからだそうです。(誤解されてしまうといけません。納豆菌が悪いということではありません。) 本当に必要なものを成長させるためには絶対に守らなければならぬということがあるということですね。「神の国はパン種に似ている。3サトンの粉に混ぜると、やがて全体がふくれる。(ルカ13・21) キリストの命が私たちの間に息づいているから、やがて醗酵し、すべての生地を変えていくだけの力があるということをイエスは

語っておられます。しかし実際に、この世界の大きな流れは私たちを押しつぶそうとしています。自分の利益を優先させるために知らず知らずのうちに嘘の情報が蔓延し、希望を失う人々があふれます。金に心が奪われて真実が見えなくなってしまうこともあります。一人で何ができるのだろうかという勇気を失うこともあります。悪魔の種は違ったものを成長させようと見えない力で縛り付けているかのようです。教会共同体は悪魔の種が入り込まないように、一人一人を守っていく責任があります。一人一人のいのちを育んでいく巣を作る責任があります。そうでないととんで

もない方向に向かってしまうかも知れません。

突然話は変わりますが、皆さんもお祈りして下さったと思います。今年は管区主催で宣教協議会が開催されました。前回の協議会と違って、私は皆さんが多くの関心を寄せ、祈りのうちに霊的な



2012年9月宣教協議会で (右は五十嵐九州教区主教)

参加をして下さったことを感じています。時には私たちは教会がこれからどうしたらよいのか閉塞感に襲われま

す。私たちは決して諦めてはいけません。それぞれが生かされていることの意味を深く見つめ、信仰の確信をしっかりと持って、神の国の完成に向かい、日々溢れ出る喜びをもって生きていきたいと思えます。(その過程には辛い事もあるでしょうが。) 協議会を支えてくれた青年たちから、自分たちの提言を作りたいという話が出ました。私はとても嬉しく思いました。自分たちの言葉で、自分の生きてきた言葉に翻訳し直す作業ができていたらどんなに素晴らしいことか。神様は確実に種を蒔かれているのを感じました。全教会が平均化はできません。各教会の最重要、最優先課題を明確にしましょう。神様は私たちと共に歩んでくださり力づけて下さっていることを信じて進んで参りましょう。来年は教区成立90周年の年です。今から自分たちの教会共同体がどのように成長していくかを夢見ていきましょう。

— 2012夏のキャンプ特集 —

み恵みの「合同子どもキャンプ」

キャンプ長 司祭 高橋 高橋 高橋

去る8月10日から12日までの2泊3日、東京教区日曜学校連絡会の主催による「合同子どもキャンプ」が清里のキープ・フォレストスタースキャンパで行われました。子ども33名、スタッフ・保護者23名の総勢56名による「合同キャンプ」でした。東京教区の12の教会と東日本大震災被災者支援団体から参加者が集い、「あそぼう、みつげよう、清里の森で」というテーマ

のもと、参加者同士が教会という大きな家族のもと、交流と絆を深めた有意義なキャンプでした。

キャンプは、「教会に連なる子ども達が各教会のワークを越えて多くの友達に出会ってほしい」「祈りと協力の共同体としてのキャンプで仲間と自然の素晴らしさに出会ってほしい」という願いのもと、2年前より構想が立ち上がっていました。しかしその後、東日本震災が起こり、社会や生活のあり様や環境が変わり、団体行事やイベントのあり方もこれまで以上に慎重に

ならざるを得ず、日曜学校連絡会では

日ごろの活動を進めながら、キャンプ開催の情報収集や準備に取り組みできました。「合同子どもキャンプ」が安全に楽しく、有意義に実現できました。



たことは、教区「信仰と生活委員会」、各教会の皆様、日曜学校連絡会の活動をお支え下さっている方々のご加勢、ご支援、ご協力によるものと、心より感謝申し上げます。

キャンプの計画段階の当初は、参加者の対象を小学生の児童だけと考えておりましたが、このキャンプへの要望やニーズの状況により、参加対象者を未就学児から中学生までとし、保護者の参加も可、としました。このキャンプでは、この状況のもと、結果的には安全で有意義なキャンプが行えたと実感に満たされております。子どもは大人によってのみ教育され成長してい

くのではなく、子どもは年齢の異なる子ども達同士がいる仲間の中にあっても大きく学び、成長していきます。まさにこの素晴らしさがはつきりと知らされた3日間でした。キャンプの終わり頃、子ども達が言いました。「わたし、あの子とお友達になったの。」「ぼく、一生懸命、神さまにお祈りしたよ。」「ぼく、友達を手伝ったよ。」「わたし、もっとキャンプにいたい。」大人とスタッフに見守られながらも、子ども達が神さまとキャンプをつくり上げていました。神さまのみ恵みに感謝いたします。

◇ ◇ ◇ 「中高生キャンプ」8月13～16日

WAKUWAKU キャンプ

新妻夏奈(中3)

キャンプのテーマは、WAKUWAKU。テーマにちなんだプログラムを通して色々なWAKUWAKUに出会いました。例えば、2日目のプログラム「沸(わく)く」では運動会、3日目の「和喰(わく)く」では森で自然の箸作り。その中でも私が一番に残ったプログラムは3日目の「WAKUWAKU」です。このプログラムでは2つのグループに分かれて「わくわく」とは何かを話し合い、その結果を大きな模造紙に絵で表しました。話した内容をみんなで一つの絵に仕上げた時の大きな達成感、すば

らしい思い出です。

参加人数は、スタッフを含めて15人と決して多くはありませんでしたが、少人数だからこそ得たことも多くありました。中高生の参加者6人が全員女子で同じ部屋だったため、とにかくみんなでたくさんおしゃべりをしました。普段の学校の時にはあまり言えないような本音まで話し合えて、とても楽しかったです。そして最後の夜は恒例の完全徹夜のカードゲーム!あつという間の4日間、でも4日前には知らない



人だったとは思えない程の絆を築けた充実した4日間でした。来年も必ず、また新しい絆を作りに参加します。

貴重な体験

田中萌実(高一)

はじめにこのキャンプに参加させていただきお恵みをお与えくださった神

様と皆様に感謝いたします。初めてこのようなキャンプに参加しましたが、本当に多くの大切な学びが与えられ、楽しい4日間でした。ありがとうございます。

清泉寮がある清里高原のふもとに差しかかったとき、車窓から碑が見えました。そこには、「やまべにむかいてわれめをあぐわがたすけはいずかたよりきたるか」(詩編121編)という言葉が刻まれていました。夏の青々とした木々、遠くに連なる山々の壮大なエネルギーを感じながら目にするこの言葉は、並々ならぬ力を持ってストリートに心の中に入ってきたように思えます。

キャンプでは朝晩のお祈りの時をもち、様々な自然体験やゲームをして素敵な時間を過ごせました。皆で意見を出し合ってひとつの作品を作り上げていくプログラムではなかなか意見が合わず苦労したりもしました。しかし、そんなときに相手の考えに耳を傾けて受け入れる方法を模索する、そんな過程を経てできあがったもののすばらしさを知る、という貴重な体験ができ、神さまによって家族とされて互いに尊重しあう生き方から生まれてくる豊かなものの美しさを垣間見ることができたような気がしました。

目の前にいる友達、自分たちの周りの木々や小鳥や空、すべてのものの中に神さまがおられるということを覚えてこれから出会うものを大切にしていきたいと思えます。

◆ ◆ ◆ 青年大会に参加して

浅草聖ヨハネ教会

ドルカス 下条 あすか

8月23〜26日に仙台で行われた日本聖公会全国青年大会に参加しました。参加者約80人のうち、青年は約60人でした。全国の教区と、大韓聖公会大田教区からも参加者があり、東京教区からは8名の青年が参加しました。4日間に行われたプログラムをご紹介したいと思います。

1日目、夕方からの開会礼拝の後、加藤博道主教から一言お話をいただき、いっしょに歩こう！プロジェクトスタッフの池住圭さんからプロジェクトの活動方針やどのような気持ちで活動しているかということについてお話をうかがいました。また、「東北ヘルプ」の事務局長を務めておられる日本キリスト教団の川上直哉牧師から東北ヘルプの活動やこれから教会がすべきことなどについてのお話をうかがいました。

2日目は「それぞれの3月11日を振

り返って」というテーマでグループに分かれて話し合い、また全体で分かち合いをしました。午後は、越山健蔵司祭から原発事故についての講演をうかがいました。その後、それまでのプロ



グラムを振り返って少人数グループで意見をわかちあい、グループ毎に紙にまとめて広間に掲示しました。夜は懇親会で、それぞれの教区の青年活動の紹介をしました。東京教区は、教区や有志団体の主催で行われている夏の中高生キャンプについて話をしました。

3日目は朝から3つのコースに分かれて、被災地めぐりをしました。行った場所は「石巻市」、「南三陸町志津川」、「新地町」の3か所です。移動はバスで、それぞれに現地の方が案内としてついてくださいました。私は志津川に行きましたが、そこには想像をはるかに超えた景色がありました。以前の風景を知らない私にとって建物

の基礎しか残っていないその場所に、町があったことを想像するのは難しいことでした。夕刻、全員が荒浜の砂浜に集まって短いお祈りを捧げました。そしてホテルに戻り、被災地めぐりをして思ったこと感じたことなどをグループにわかれて分かち合い、最終日の礼拝で捧げる代祷をグループ毎にひとつずつ考えました。

最終日は全員で聖餐式を捧げました。現地で拾った木で作った十字架を用い、楽器をもってきた人たちが奏樂をし、3日目の分かち合いのグループの代表が代祷をしました。聖書朗読も参加者が行いました。皆で作りに上げる礼拝はとても印象深く、思い出に残る礼拝となりました。

この大会に参加して、「東日本震災はまだおわっていない」ということがわかりました。まだまだ大変な生活を送っている人たち、支援活動をしている人たちのことを憶えつづけ、自分たちにできることをしていきたいです。

司祭と語ろう (その4)

司祭 石坂みゆ子

今回は広報委員の前島 恵が、聖バルナバ教会の牧師館で話を伺いました。お話に入る前に驚きと共に喜ばせて下さったのは、お菓子と共に供された薄茶でした。一服にとどまらず、お代わりまで頂戴してしまいました

— 先ず教会に行かれるようになったときつかけから伺いたいのですが。



石坂 家族はいわゆる敬虔な信徒ではなかつたのですが、教会へは時々行っていました。父や母、姉も、特定の教派に属するわけでもなく、家族全員で揃って行くわけでもなく、たぶん各々の都合に合わせて通っていたのだらうと思います。姉に連れられて、他教派の礼拝に出席した記憶もあります。気がついたときには、小学校の高学年で、聖公会の教会に行っていました。でも子どもの礼拝：シール貼りや紙芝居や楽しいお話：に興味がわきませんでした。そ

れでいわゆる大人の主日の聖餐式に出席していました。全く意味もわからずに。

— 祈禱書に分冊など無かつた頃ですから、聖歌集付きの分厚い祈禱書と聖書を抱えて、礼拝の箇所を探しているうちに、聖餐式が終わってしまうので、何故こんな面倒な！と思いつつでも何故か通っていました。誰からも強要されませんでしたので、勝手気ままに行きたい時に行っていたと云う風です。

— 幼い頃から宗教心は個人の自由という環境だったのでしょうか。

石坂 祖父母も一緒に住んでいて、お仏壇がありまして、お花やお線香をあげていました。そのことと、キリスト教は、わたしにとって全然矛盾しないのです。矛盾がある人に矛盾がないといつても通じるわけもないのですが。

— 大きくなってから友人と教団へ行ったこともありましたが、聖公会の素晴らしさは、司式者と会衆の応答にあると感じました。聖餐式では、自分の意思で前へ出ていって聖餐に与る…そ

れが良いナーと思いました。

— 神学院に入学するまでの経緯についてはいかがでしょうか。

石坂 人に話すとき長くなるし、言葉にすると真実味に欠けるので、お伝えするのが難しいのですが、日々の生活の中で起こった様々な出会いと出来事、情報の話し手と受け手との間に生じた思いの違い(笑)の積み重ねの結果としての、お導きであったと思います。どこからも反対がなかつたことに、とても感謝しています。

— 子どもの頃の思い出を聞かせて下さい。

石坂 長野の善光寺あたりに住んでいた頃の記憶に、学校の帰り道、空いっぱいトンボが飛んでいて、指先に勝手に止まるんです。ひよいひよいと両手指にはさんで、また空へ放して遊んでいました。後から記憶違いかも知れないと思っていましたが、養老孟司さんの本にも同じようなことが書かれていて「トンボが顔に当たってきた」と。蝶々は粉が落ちるので嫌でしたが、トンボは大丈夫でした。

神学校へ入るまでは、お茶の

「司祭のこの一冊」

『人生の四季』

(ポール・トゥルニエ著)

日本キリスト教団出版局

2011年再版発行

司祭 井口 諭

著者トゥルニエ(1889-1986)は、スイスの医師・精神療法家です。「人生の四季」は、講演記録に加筆されて1967年に出版、日本語版は70年に出版、以来読み続けられ2007年に再び発行されました。



— 人生の過程を春夏秋冬の四季に区切って、「キリスト教は人間を抑圧するものか、解放するものか」、「人生の第二の転機」、「人生の意味」を加筆しています。これは神学書ではなく、トゥルニエ自身の信仰です。著者が力説したかった4章「キリスト教は人間を抑圧するものか、解放するものか」を先に読むこともお勧めします。

「宗教とは、神とその恩恵を情熱的に追求することを意

味します。これに反して道徳主義とは自分自身を追求すること、別な言い方をすれば、善悪を自分の力で識別し、あらゆる過ちから自分で自分の身を守ることを自分に要求することです。極端になると、しまいに神も必要ないし、神の恩恵もいらぬということになるのです。道徳主義は、教会の幼稚退行現象であるといえます。福音的自己否定とは、神に導かれて、より豊かな展開に達するた

めに、自分の人生の方向を自分の一存で決定することをやめるといふことなのです。キリスト教の中心は、私たちをとりこにして、私たちの人格の前進的発展のさまざまになつていくこの世のさまざまな財産を放棄するということだけなのです。非情な鉄格子から私たちを解放してくれるものなのです。」と述べています。

稽古をしながら、多少教えたりもしていました。きっかけは高校での学校茶道で、先生のお誘いに甘えて、ご自宅へもおけいこに通いました。その後、北関東、東京などの転勤先でも、いろいろな先生の手ほどきを受けました。ずいぶんと前になりましたが、師範仲間と5人での花月のお稽古は、本当に楽しみでした。同時に必死にしましたことは、着物の着付けでした。初めは一日がかりだったのが、最後は15分くらいで着られるようになりました。

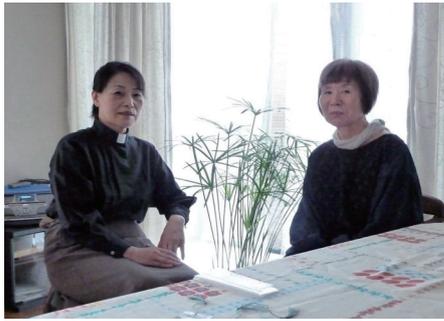
当時は全く考えたこともありませんでしたが、今になれば、聖餐式とお茶の点前の共通点に、感じ入るばかりです。ですが、それを他の人に伝えるのは、なかなか難しいことです。両方を体験してみて、初めて自分で納得することができたのかもしれない。過去のどんな経験も、無駄にはならなかったと、しみじみ思っています。

― 牧師にならなかつたら何をされていたでしょうか？

石坂 何ともわかりませんが、お茶のお稽古をしているかも。

― 聖餐式の中の説教で心がけている点はいかがでしょうか。

石坂 なるべくテキストに沿いたいということ、自分が出来ない道徳訓みたいなことは言わないようにしようと。こうすればこうなりますよといった因果応報の神さまではないということ。誰でも、知識や知恵や思い



込みが重なる、あたかも自分が神のような錯覚に陥りがち。これだけは避けなきゃねということ。お話は、短いに越したことはない(?)

― 最後に、今の世の中で牧師に求められていることの中で、したいことあるいは必要と思う事をお聞かせください。

石坂 お伝えし難いのですが、

他の教会の方から連絡が入って、会いに来られるんです。理由を尋ねると、自分の教会の牧師は立派な男の先生で、世話を聞いてもらうには気が引ける。石坂なら応えてくれそうだと。例えば、家族は教会と無縁なので、自分の葬式の手筈について、あらかじめ知っておきたい。あるいは病院のベッドで亡くなった場合、どのようにしてもらえるのか。結婚前後に起こった問題を抱えて、いろんな教会に相談してみたが、答えを見つけられないとか。それから、どこかで出会ったらしい方がインターネットでわたしを探して相談しに来られたり。

― フランクな人柄が人を惹きつけるのでしょうか、悩んでいる人にとつて、垣根が低いということは切に求められている要素かもしれませんね。

石坂 教会へは来たいのだけれども、来ることができないような方の、密やかな話を、聞いて差し上げることができたら、それもわたしの役割かもしれないと、感じています。

「イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。」

(マルコ7・33)

このみ言葉は、イエス様が行なわれた癒しの奇跡の一つです。しかし、この物語は、単純な奇跡ではなくて、キリスト者は何をやる人なのか、どのような日々の生活、どのような人生を送る者なのかについて伝えているお話でもあると思います。

《聖書を開いて》④

私たちの耳は開いていますか

司祭 朴 美賢 (パク・ミヒョン)

それでは、イエス様はなぜ、先に指を耳に入れて、その後、舌に触れたのでしょうか。その順番にはどんな意味があるのでしょうか。それは、聞くことを先にして、話すことは後にしなさいという意味ではないかと思えます。つまり、話したり行動するためにはまず、聞くことをしなければならぬということではないでしょうか。それは「少し単純すぎる」と皆さんは思うかも知れませんが、これ

がまさにこの奇跡を通して、私たちに改めて伝えているイエス様の御心だと私は思います。

そうですね、キリスト者は「聞く」人なのです。何より、神様の御声を聞く人なのです。しかし、神様のみ声は、耳が開かれている人だけが聞こえる声なのです。耳が開かれている人だけが、自分自身が誰なのか聞くことができます。私たち一人一人は皆、神様の姿で創造され、神様の愛によって生かされる存在であることを感じます。そして、今もいろいろな苦しみと悲しみ、苦難と痛みにあっている人々もすべて神様の物であることを分かるようになります。そうですね。耳が開いている人こそが世の中に広く響いている神様の声を聞いて、感じる事ができるのです。そして、その声を聞くことがまさに、神の宣教の始まりであり、自分自身と隣人を愛することの始まりなのです。それでは、今、私たちの耳は開いているのでしょうか。

「被災地リレーウォークを通じてフクシマを想う」

森田 信也

9月2日から9日まで延べ25名の方に参加いただき、東日本大震災に加えて原発事故に苦しむフクシマに行きました。旅の目的は、①歩いて津波による犠牲者に祈りを捧げる ②「いっしょに歩こうプロジェクト」の働きを知り、参加する ③苦しむフクシマそして聖公会の教会や信徒の皆さんと繋がることでした。

福島聖ステパノ教会をスタート、磯山聖ヨハネ教会の3人の信徒の方を含め、福島県最北の新地町



から、相馬市、南相馬市南部、そして車で原発を迂回して郡山聖ペテロ聖パウロ教会へ。そして原発南側の楢葉町からいわき市の小名浜聖ペテロ教会まで沿岸10か所です。祈りを捧げ、厳しい残暑の中で全体約60kmを参加者で歩き継ぎました。

福島県の被災地は、警戒区

域内の原発周辺地区、ほとんどの住民が避難し復興が進まない南相馬市南部や楢葉町、高線量に苦しむ飯館村などの山間部、除染が進む地区、そして福島市・郡山市など線量が高くとも一見日常生活が営まれている地域など複雑です。その中で、すでに避難した人、仕事や生活のために残らざるを得ない人、また住むことが当然と思う方も多くいます。しかし、「大震災は人々の絆をもたらししたが、原発は人々の関係を破壊した。」という言葉を実感しました。

今年、原発に反

対する声明が教区そして管区総会でも出されました。その中で、私たちが将来にわたり苦しみが続くフクシマの方々とどのように繋がっていかれるか、その必要性とともにその重さも実感した旅でした。

(正義と平和協議会・人権委員会主催)

2012教区合同礼拝

9月22日(土・秋分の日)、香蘭女学校において、14時から大畑主教の司式で合同礼拝が行われた。今年も直前に日本聖公会の宣教協議会が開催されたため、いつものフェスティバルではなく、合同礼拝とし、聖餐式後、宣教協議会報告を行った。出席者は約450名であった。

大畑主教は説教の中で「私たちは、全知全能の神を信じ、イエスと共に歩もうとしているが、現実の世界では東日本大震災のような思いがけないことが起きる。何も信じられないような事態が起こり、なぜ、どうして、とその答を見出そうとする。私も正直その答の糸口さえ分らない。しかし私たちが、その答が見つかったから行動をするというものではない。状況を変えるために、まず一歩踏み出す必要がある。」と語り、続けて「イエスは生涯にわたって、『主の僕』としての道から引き離そうとする誘惑と戦ってき

た。最も信頼する弟子のペテロでさえ人間的な思いから、慈しみ深い神がイエスを十字架の道に進ませるはずはない、苦難を受けるはずがないと主張した。しかし、神は憐れみ深いからこそイエスを十字架の道に進ませ、すべての人が愛の中に生きるようにされた。私たちはいつもペテロ



のように『人の思い』に支配される危険をもっている。だからこそ、神は私たちを集め、互いに支え合い、祈り合う共同体を作った。聖餐によって力づけられ、神の計画の実現のため、私たちの共同体が成長し、日々イエスの十字架に励まされ喜びのうちに進んで

いきたい。」と結んだ。

休憩をはさみ、15時45分から行われた宣教協議会の報告会では、参加者が「清水シスターによる原発についての講演」「いっしょに歩こうプロジェクトからの報告」「基調講演」「バイブル・シェアリング」「植松主教の閉会礼拝の説教」「提言」「全体のまとめ」などの報告を行った。特に重要な「提言」は、①み言葉に聴き、伝えることへケリユグマ②世界、社会の必要に応え仕えることへディアコニア③世界の中で福音を具体的に証しすることへマルトウリア④祈り、礼拝することへレイトルギア⑤主にある交わり、共同体となることへコイノニアの5つからなり、これらの5つの糸がより合わさって1本の強い綱となるという宣教の指針を示した。今後、各教会がこれをもとに具体的な取り組みを考えていくことが大切になるであろう。

全ての報告を終え、会は17時に終了した。(広報委員会)

ようこそ月島聖公会へ

歴史は古く、1900年に聖路加国際病院のR・トイスラー医師が佃島に診療所を開設し、これが基礎となりました。

1920年に月島に幼稚園が建てられ、ミス・ヘンテ宣教師による熱心な宣教と幼児教

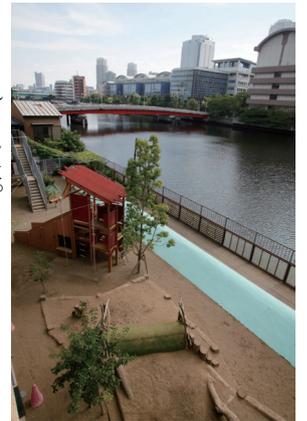


育の活動が行われました。しかし先の大戦で中断を余儀なくされ、彼女は月島への愛と宣教への思いを胸に、後髪を引かれるように帰国しました。

戦後1954年に地元の人々の強い願いと協力により、月島聖ルカ保育園と教会が併設され、働きが再開されました。その後1960年に木造2

階建ての保育園牧師館が建設され、月島聖公会は保育園の一室を礼拝の場として使用し、主日礼拝を守ってきました。

しかし独自の聖堂がほしいという強い思いと、老朽化した保育園舎では園児の生命と安全を守るには無理があるという思いが重なり、聖堂と園舎の再建が話し合われ、教区はこれに呼応し、2007年からこのための特別委員会を設置、3年の歳月を経て計画が具体化さ



れました。

その結果、保育園は社会福祉法人になりましたが、キリスト教の理念に基づいた保育を行うことが認められ、多くの方々の温かいご支援により、1・2階は保育園、3階は聖堂と牧師館といった形で建物が完成、2011年3月5日に献堂式を迎えました。その感謝の気持ちを大切に、新しい歩みを始めました。主日礼拝出席者は倍増し、細々としていた日曜学校にも7家族が出席するようになりました。また福島から放射

能汚染を避けて東京に移住して来られた母子の集い「月島キッズ・デイ」を始めたところ、近隣諸教会の方々やGFS関係者、立教女学院や立教中学関係者がボランティアとして参加し、温かい愛と協力の輪が広がっています。また地域の子どもたちが集団遊びをする「聖ルカ子ども村」には毎回15人ほどの子どもが集い、GFS月島支部にも10人

ほどが参加、さらに英語聖餐式にはフィリピン人を中心に10数人が出席します。そのほか浅草聖ヨハネ教会の日曜給食を月島で作って届けたり、東日本大震災支援のためのチャリティコンサートを行うなど、小さな教会にもかかわらず、他教会の人々や多くの協力者と共に、楽しい活動が次々と展開されています。(マーガレット 長島令子)

「芝公園の窓から」①

前を走っていたタクシーに「腕よりも心で運転で 日本を元気に」というシールが貼ってあった。目の前に山積する業務遂行と新たな一歩を踏み出し始めた東京教区における宣教の青写真を描きながら宣教主事としての1年半があつという間に過ぎた。「今」が我々にとって一番大切な時期であると感じた時間だった。2011年2月大畑主教の着座、各委員会の諸活動、「東京教区の宣教を考える会」、「2012東京教区合同礼拝&宣教協議会報告会」など様々な機会を通して今後の教区の宣教方向について活発な議論が行われている。また2013年東京教区は創立90周年を迎える。これまでの神様による導きに感謝し、100周年に向けて我々が歩むべき方向について考える時期である。今こそ「腕も心も共に用いる奉仕で 教区を元気に」を心に留めながら、新たに生まれ変わろうとしている「東京教区」が主のみ旨にかなうものとなりますように「働き」、「お祈り」をささげたい。

宣教主事 司祭 卓 志雄 (タク・ジウン)

《10月の奉献先から》

浅草日曜給食活動

日曜日の朝9時30分〜50分の配食時間帯に、1食を求めて教会にやって来る野宿生活者へお弁当（鶏五目炊込みご飯250gのパック詰め）を提供する活動で、開始して12年目になる。野宿生活者の自立支援活動ではないのだが、生き続けていく命をつなぐ1食になればとの思いである。



今年（2010年度）の配食1回平均は452食（最少333、最多603）。昨1年間では495食で、2010年度をピークにやや減少傾向が見られる。

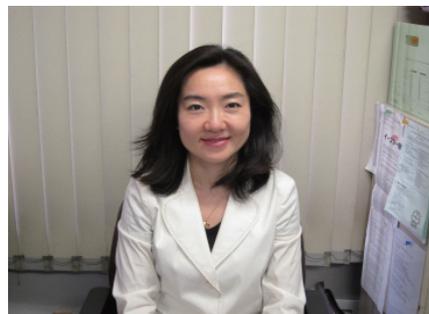
要。また炊出し支援には毎週約200食をA教会が、月1回約100食をS教会とT聖公会がそれぞれ。すべての面で支援を頂戴しながらの活動。浅草繁華街から歩いて往復30分もある教会の立地環境のことを考えると、わずかな1食のために来る450人という数字は決して少ないものではないはずで、野宿を余儀なくされている人たち、その要因を生んでいる社会、野宿生活者たちへの偏見、野宿生活者支援への行政の在り方など、いろいろ考えさせられる。ここ数年、寄せられていた近隣有志の人たちからの反対の声も昨年6月以降、聞かれなくなった。近隣への配慮を欠かすことはないが、淡々と活動している昨今である。

活動に要する物資・資金はすべて、個人・団体からいただく献米と献金。1回分500食には米50kgほどが入用。具材などを含めると約3万7千余円、1食約75円の計算。一方、ボランティアは教会・他教会・施設や一般から毎回20人以上は必

伊藤裕元 動運営委員

《11月の奉献先から》

障害者週間のため開かれた教会として



2012年4月に日本キリスト教協議会総幹事に着任しました網中彰子と申します。立教大学文学部キリスト教学科では奥石勇先生の授業を受け、関正勝先生のゼミに出席し、聖公会神学院で八木正言先生の卒業礼拝に出席させていただいたことがあります。日本聖公会には親しみがあります。祈り、お支え下さる日本聖公会皆様に心より感謝するとともに、主の祝福が豊かにありますようお願いいたします。

いつつ歩んでいることを信じます。NCCは多様性の中的一致を求め、祈りの支えによって歩んでいます。諸宗教の方々と協力する場があり、それぞれ心静かに大いなる存在と向き合う時間が大切にされています。

更にチヨキ、主の復活の勝利ビクトリーのVサインとなります。障害者週間を迎え、教会の豊かな姿を再確認し、再臨の主と共に仰ぐ友として、あらゆる垣根を越えることが出来るよう聖霊の導きを祈りましょう。日本キリスト教協議会 総幹事 網中彰子 ※次号は12月23日発行予定

今総会期の標語聖句は「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」（マルコ1章17）です。障害者週間にあつて誰もが自分の力のみで歩んでいるのではなく、キリストの憐みにより、人知れず守られ、導かれて、主に従

なる神の御計画の内々に生かされる幸いを思う時、何もかも自分で解決しようと頑張り過ぎて握りしめる、じゃんけんというところのグーではなく、自己中心の罪を主に手放す、パーの姿勢でありたいと願います。「わたしについて来なさい。」と招く主により頼む信仰は、グーからパー、

あっと聖書、ときどきユーモア (三)

- あくび
牧師「Aさん、今日、あなたは私の説教中、あくびばかりしていましたね」
信徒「すみません、先生、昨日遅くまで仕事をしていましたから」
牧師「いいんです。一言お礼を言おうと思ひましてね」
信徒「どうしてですか」
牧師「いや、説教中起きていたのは、あなただけでしたから」
- 熱のこもった説教
信徒「先生、今日の十戒についての説教はすごく気合いがはいっていましたね」
牧師「そうかい」
信徒「特に『父と母をうやまえ』のところは熱がこもって、すごい迫力を感じました」
牧師「それはそうだよ、今日は珍しく子供たちが全員礼拝に出席していたからね」